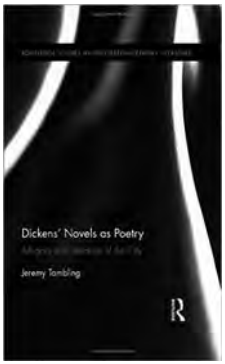

Jeremy TAMBLING,
Dickens' Novels as Poetry: Allegory and Literature of the City
(viii＋238 頁，New York: Routledge，2015 年)
ISBN: 978-1138808270

(評) 渡部智也
Tomoya WATANABE

最初に書評とは直接関係のない話から書く．2015 年 6 月 13 日に関西外国語大学で開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会は，日本支部史上に残る大会となった．というのも，語学研究者によるシンポジウムが実に数十年ぶりにおこなわれたからである．4 名の語学研究者によるディケンズへの語学的見地からのアプローチとその成果に関する発表は，普段文学的観点から研究をおこなっている者にとっては新鮮かつ刺激的なものだった．発表後の質疑応答も活発で，たいへん有意義なシンポジウムであったと思う．さて，その質疑応答の時間のことである．フロアからの質問を募る司会者の声に応え，佐々木徹支部長が手を挙げた．マイクを手にした佐々木先生は，次のように述べて発表者らをねぎらった．「僕は，文学研究というのは作品の言葉を読むことだと思っているので，その点で今日は非常に興味深くお話拝聴しました」．いかにも文学テクストにこだわる訓詁の学を旨とする佐々木先生らしい言葉だと思う．近年，ディケンズのテクストを丹念に読み解くような類いの研究は減り，替わって文化的，社会的，あるいは歴史的背景を中心に扱ったものが目立つ．確かにそういった研究自体は非常に意義深いものではあるが，同時に，「ディケンズ・フェロウシップ」という，まず何よりも「ディケンズの作品」を愛する人々の集まりに属している者としては，いささか寂しい気がするのもまた事実である．そのため，今回のシンポジウムはディケンズのテクストにこだわることの面白みを再確認させてくれる非常に貴重な機会となった．そして，まるでこのような思いに応えるかのように出版されたのが (正確には出版の時期は違うのだが)，今回取り上げるジェレミー・タンブリングの著書である．

本書はとにかくディケンズの言語にこだわった研究書である．著者タンブリングの意図は長大なイントロダクションの中ではっきりと記されている．彼はジョージ・ヘンリー・ルイスの “sensations never passed into ideas” というディケ

ンズ批判を取り上げて，ディケンズにおいては思想というものは決して意識的な明確さを持って捉えられるものではなく，ルイスの主張はディケンズの用いる言語というものを度外視している，と述べ，本書ではディケンズの言語にこだわった研究をおこなうことを明らかにする．著者は『荒涼館』のハロルド・スキムポールの台詞に登場する “unconscious poetry” というやや奇抜な表現を引き合いに出しつつ，ディケンズが書いた小説を “poetry” と呼称し，その “poetry” を分析することを本書の目的とする，と言う．つまり，本書のタイトル，*Dickens' Novels as Poetry* は，それ自体が著者のディケンズの言語への強い関心を反映したものと言えるのだ．

その本書であるが，全部で 4 つのパート，14 の章から構成されている．以下，その内容をざっと概観してみよう．第 1 章では，ディケンズ自身の読書がいかに彼の書く言語に影響を与えたのか，という問いに始まり，作品に見られる数々の他作品への言及，たとえば『大いなる遺産』とメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』，『荒涼館』とロマン派との関連等を例示した上で，『骨董屋』のディック・スウィヴェラーが様々な文学作品を織り交ぜて台詞を発する様を考察する．途中，ただ例を挙げているだけ，という印象を与える箇所も見られるが，他作品への言及の分析量は圧倒的であり，読んでいて，この作品にこのような詩への言及があるのか，と驚かされることが多々あった．続く第 2 章は，ディケンズとホガースの関連がその中心となっている．ホガースの作品 *Gin Lane* の影響が，ディケンズの『オリヴァー・ツイスト』『ドンビー父子』『リトル・ドリット』『二都物語』などに見られることを考察し，ディケンズ自身は否定しているものの，ディケンズはカリカチュア作家であると論じている．第 3 章では『骨董屋』を扱い，カリカチュアが本小説にとって欠かせぬ要素になっていると述べた上で，その中で特に重要な役割を果たす人物としてクィルプの描写を中心に分析している．

第 4 章からは第 2 部に入る．著者は，ノーマン・ペイジが，自身の公開朗読の影響により，ディケンズの後年の作品がより “speech-based prose” になったと述べていることに反論し，初期の作品においても会話や発話が重要な役割を担っていたと主張する．その例として第 4 章では「速記的な」喋り方をするジングルと，ウェラー親子のジョークを中心に取り上げる．第 5 章においては，前半で現実として描かれたトジャーズの下宿屋の描写を段落ごとに分析し，後半では言葉を駆使してそのような現実に対して戦いを挑んでいるミセス・ギャンプとヤング・ベイリーのその言葉を解読する．第 6 章では *Household Words* の記事を足がかりにフロイト理論の “disavowal”，ラカン理論の “name of the father” といった用語を用いつつ，成長の止まった存在という観点からポール・ドンビーの描写を読み解

いている．

第 3 部はディケンズ中後期作品の，とりわけ冒頭の描写に焦点をあてて考察している．第 7 章では，主に『ドンビー父子』や『デイヴィッド・コパーフィールド』等に登場する人物の名前に着目し，その綴りや音に基づく連想から，複数の作品にまたがる共通項の分析をおこなっている．第 8 章では，ラカンによる文字 (“letter”) の理論を援用しつつ，『荒涼館』の冒頭 3 章と，エスタがデドロック夫人と出会う 18 章との関連を考察する．第 9 章では，『リトル・ドリット』冒頭で “stare” という語が同じひとつの段落内に 10 回用いられている点に着目し，まずこの語をキーワードとして第 1 巻冒頭の数章を，次いで “shadow”，“spectre” といった語を手がかりに第 2 巻の冒頭を読み，その上で関連する事象として自殺したマードル氏の死体の描写の意味について考察する．第 10 章では，『大いなる遺産』冒頭の長い引用に始まり，フロイト，ラカン，レヴィナスを援用しつつ，本作に見られるアイデンティティーがひとつであり得ないことを論じる．そして後半では類例として『互いの友』の冒頭とジョン・ハーモンについて扱う．

第 11 章からは第 4 部に入る．第 11 章では，まずベンヤミンに基づいて夢とは何かという問題を議論する．そして 19 世紀の夢の理論やディケンズの考え方，さらにはメスメリズム等の催眠術への関心を概観した上で，夢と，物事の持つ二重性との関連を指摘し，最後に夢同様に重要な事象である目覚めと，そして目覚めることと死との結びつきを，ドリット氏を例として考察する．続く第 12 章では，その「目覚めること」との関連から，『オリヴァー・ツイスト』におけるかの有名なオリヴァーの眠り，すなわち，眠りとも目覚めともつかない状態で，フェイギンが盗品を眺めながら独り言を言う様を目にする場面，および，メイリー夫人の別荘の窓越しにフェイギンとマンクスが現れる様を目撃する場面と，『大いなる遺産』でピップが見るヤスリの夢の描写を考察する．なお，評者はこれまでディケンズ作品における眠りの分析を中心とする研究をおこなってきたため，この章については特に興味を持って読んだのだが，全部で 5 ページという分量の少なさに加えて，これらの場面に関する先行研究への言及や分析もほぼ皆無であり，肩すかしを食らった印象であった．第 13 章は，『デイヴィッド・コパーフィールド』の第 55 章に見られる嵐の場面を取り上げ，この嵐が物語冒頭から徐々に強まっていったということを，細心のテクスト読解を通じて明らかにしている．論の本筋とは関わっていないが，スティアフォースの死とカーカーの死の場面との類似を指摘し，両者の死は同じ第 55 章に描かれている，と述べられていたのにははっとさせられた (ただし，その数字の一致自体に特に何か意味があるとは述べられていない)．最終章に当たる第 14 章では，『エドウィン・ドルードの謎』の冒頭の場面の引用とジャスパーの夢の細かい分析に始まり，これまで

の章で扱ってきた登場人物との比較やコリンズの『月長石』との対比を交えつつ，ジャスパーに見られるような，決して単一のものになることのない自己，アイデンティティーの問題を追及する．このように，ディケンズの小説の言語の分析を中心に据えつつも，フロイトやラカン，デリダ，ベンヤミン，レヴィナス，フーコーと言った数々の理論家，思想家に言及した，幅の広い論考となっている．

さて，最初に述べたように，本書の最大の特徴は著者タンブリングのディケンズの用いた言語に対する，時に細かすぎるほどのこだわりである．このこだわりを最もよく映しているのが，*OED* への言及の多さである．本書は，著者自身が引用文献に関する説明の中で述べているように，*OED* からの引証が非常に多い．実に 3 ページに一度の割合で *OED* への言及があると言っても良いほどだ．言葉の意味や語源に対して気を配るという著者の意識の高さの表れと言えようが，このような読みが最も生かされているのが，『ドンビー父子』を扱った第 6 章である．この章では幼いポール・ドンビーが主な研究対象となっているのだが，その中で彼を埋葬する場面への言及がある．父ドンビー氏が墓碑銘に “only child” と刻ませようとして，“only son” の間違いでは，と問われる有名な場面である．一面的には，娘であるフローレンスが彼の眼中に全くないことを示しているわけだが，タンブリングは，そもそもドンビー氏は常に娘フローレンスを完全に無視してきたのであり，なぜ最初から “only son” という記述ではなかったのかと疑義を呈する．その上で，“Dombey and Son” という表現は，その名が示すような別個の 2 つの存在 (2 人の人間) を意味するものではなく，1 つの男性的な総体をあらわし，いわばドンビー氏と “Son” とは一体であるので，彼にとって “Son” を埋葬するという行為は，自らを滅ぼす行為に等しい (だから “son” という言葉を墓碑銘に刻めなかった) と論じていく．評者が唸ったのは，論を進める中で，先ほどの “only child” という表記の理由を考察している部分である．著者は，この “child” という言葉が，シェークスピアの『冬物語』に見られるように，「女の子」を意味する単語として使用され得ること，そして最後にこの意味でこの単語が用いられた事例が『ドンビー父子』執筆より後の 1888 年であることを *OED* からの引証を元に明らかにした上で，この場面でドンビー氏はポールを埋葬しながら，実は無意識のうちにフローレンスの方を埋葬しようとしている，と考察している．むろん疑問の余地はあるが，*OED* を巧みに用いることで，説得力のある論を展開している箇所と言える．

また，*OED* に依らずとも，その細かい言葉への気遣いによって，論に厚みを加えている箇所も多い．例えば『リトル・ドリット』を扱った第 9 章で，マードル氏が風呂場で自殺した場面を引用し，彼が自殺に使用したペンナイフが「汚れている」(“soiled”) と書かれている箇所に着目する．その上で，この場面は血を

連想しがちだが，それだけではなく，人が死ぬことによって筋肉が弛緩し，汚物が漏れ出ていることをこの単語から読み解き，この場面を，抑圧する力が失われることによって，その下に抑えられていたものが表に出てくる場面として考察している．よく言われているように，マードル (“Merdle”) という名前が，「排泄物」(“merd”) という言葉と関連することを考えると，なるほどと感じさせられる議論と言えよう．

このように，細かい言葉に注意を払うことで鋭い読みを展開している本書であるが，一方で逆にこの言葉への細かすぎるとさえ思われるこだわりが，疑問の残る論考を生み出してしまうケースも見られる．たとえば登場人物の名前を中心に扱う第 7 章で，『大いなる遺産』のコンピソン (“Compeyson”) に着目し，この名前から，“compey”，“pompey”，さらには “compass” や “accomplice” への連想を働かせるのだが，やや無理矢理という感がある．さらに，語尾の “-son” に着目し，これが “prison” とかけたしゃれであると主張するほか，息子という意味での “son” に着目し，“Dombey and Son” と韻を踏んでいる (“Compey and Son”)，とまで述べる．これはまだ冗談めかしているが，さらに子供殺しの側面を持つマードストーン (“Murdstone”) につなげ，彼の名前では “son” が “stone” に変わり，ミセス・ジョーやスティアフォースのハンマーを思わせる “t” が “son” に加えられている (大文字の T と形が似ている)，というような話になると，いささか外連味がありすぎるように思われる．少なくとも先ほど例として挙げた，語源的な情報を駆使した緻密な論考とは大きく異なると感じられるだろう．こういった細かい点は，論全体から見れば些末なことなのかも知れない．しかしながら，言葉にこだわるからこそ，逆にもう少し慎重さも必要ではないだろうか．

本書は，ディケンズが用いた言葉に対する精緻な分析に根ざした非常に興味深い論考となっている．しかし同時に，そこまで言えるのだろうかと疑問符をつけたくなる部分も目立つ．冒頭で述べたように，文学研究の基本は「作品の言葉を読むこと」と言っても過言ではない．だが著者タンブリングの場合，時に言葉の研究を超えた言葉遊びに堕するケースが目につくように思われる．本書の出版元である Routledge 社のウェブサイトでは，「本書はディケンズ研究を刺激的で新しい方向に導いていく」と紹介されている．確かに，本書によるディケンズの言語の分析は読み応えがあり，なるほどと感じさせられる部分も多々ある．とはいえ，誰もがその読みに導かれるかと言えば，必ずしもそうとは限らないのである．